

## 新居格年譜補正稿 —— 昭和20年代を中心に ——

田中 敏生

Explanatory Notes on the Chronological Record of *Nii Itaru*  
—— especially from 1945 through 1951 ——

Toshio TANAKA

KEYWORDS : レイモンド パール・バック ユネスコ運動 松尾邦之助 森戸辰男 辻潤

### はじめに

今日、新居格（にい・いたる：1888～1951）の名前を知る人は、そう多くはないであろう。せいぜいパール・バック『大地』（新潮文庫）の翻訳者として目にする程度ではないかと思われる。生前の精力的な活動ぶりに比して、あまりにも速く忘れ去られたことに驚く、そんな感想を目にすることもある（下の①②冒頭）。

①秋山 清「反骨と自由の人新居格」『歴史と人物』（1巻2号，1971年10月，中央公論社）

②和巻耿介『評伝 新居格』（文治堂書店，1991年12月）〔本稿では〈評伝〉と略記する〕

③小松隆二「〈小伝〉“地方自治・地方行政の鑑” 新居格の生涯と業績——典型的な自由人・アナキスト」『杉並区長日記 地方自治の先駆者・新居格』（虹寛社，2017年10月）附載〔本稿では〈小伝〉と略記する〕

この人をめぐる研究もさほど多くはない。むしろ寥々と言ってもよいくらいである。その理由のひとつは、彼があまりにも広範囲な活動をしていて捉えどころに苦しむということもあろうし、そもそもその事跡をめぐる事実確認自体が容易ではないということも考えられよう。小松隆二氏は《死後には、文筆活動のみでも膨大な量の著作が遺されていた。》と述べている（上の③〈小伝〉，p248）。「文筆活動のみでも」というのは、社会活動のほうでも、消費組合や杉並区長をはじめ、様々な方面での活躍が見

られるからである。

こうした現状に鑑みれば、彼の年譜的な事実を確認しておくことも、研究を進めるためには大いに必要であろう。そこで本稿では、上の②の〈評伝〉に附載された年譜（以下〈年譜〉と略記する）に基づきながら、些かの補いを試みたい。時代を戦後に限るのは、多くを一度になすことはできないという、実際の事情による。具体的に行なった行き方を簡条書きふうを示すと、次のようになる。

①〈評伝〉附載の〈年譜〉に基づきながら、その確認や関連することがらの補いを行なった（確認できなかったものもある）。事実と異なるものについては、それを改めた。〈年譜〉の掲出に際しては、①②③，ABC，などの記号を適宜附した。

②依拠資料としてデジタルコレクション（国立国会図書館）を用いたものについては、参照箇所をコマ数（ページ数ではなく）で示した。URLも、つとめて示すよう心掛けた。一般公開されている資料には「◎」印を、送信サービスで見られるものには「○」印を、それぞれ附した（それ以外の資料は「・」印）。

③当該年に刊行された書物を、「サイニー」の蔵書検索等で補った。

④小松隆二氏の〈小伝〉に記載のあることがらも、要約的に掲げた。これも、補いうるものについては、それを記した。

⑤〔検索状況〕の項を設けて、「サイニー」や「ざっ

さくプラス」でのヒット件数を記した。彼の活動ぶりを、分量面から窺うやすくなるうかと考えたからである。

- ⑥「サイニー」は、本や論文等「すべて」の件数を示した。「ざっさくプラス」は、「20世紀メディア情報データベース」に連携されたもの以外のものを「単体」と呼んで区別した（したがって、「単体」には、デジタルコレクション等によるものも含まれる）。「単体」では、明らかに重複と認められるものは、件数から除いた。他方「20世紀メディア情報データベース」（昭和20～24年のみ）は、単純なヒット件数を掲げるにとどめた。

- ⑦年齢は、旧に仍って数え年を用いた。また西暦と元号とは適宜使い、どちらかに統一することはしなかった。

もとよりこれらは甚だ不完全なものに過ぎない。「稿」の字を附するゆえんであるが、それでも、研究の現段階では全く無意味なものにはならないだろうと思われる。また、純然たる事実確認の枠からはみ出るが、筆者なりのコメントを添えたところもある。それをも含めて、本稿は、新居格をめぐる研究ノートである。

## 昭和20年（1945）〔58歳〕

昭和20年について、〈年譜〉ではこの項目を立てない。しかし、新居格が東京に帰ってきたのは、この年の九月であった。「生活と文学について」（『心の暦日』昭和22年刊、後掲）に次のような記事が見られる（デジタルコレクションで一般公開されている。以下この種の資料は◎印を附す）。

- ◎《去年の九月四日、わたしが疎開してゐた伊豆の部落から東京へ帰ってから、早くも既に半歳以上が過ぎた。》（19コマ）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1130289/1/19>

- ◎《終戦後、半月ほどして、（東京の家が戦災に遭つてゐなかつたので）帰京出来たわたしであつた。》（20コマ）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1130289/1/20>

〔『農民』について〕

この年（終戦よりも前になるが）、レイモント（Reymont, Władysław Stanisław）の『農民』の翻訳を再刊している（第一部・全12章中、第5章まで）。

- ◎『農民』（第一部・秋・上）（文学社、昭和20年7月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1137099>

この作品は、昭和14年から16年にかけて、第一書房から翻訳が出ていた（デジタルコレクション・送信サービスで見ることができる。以下、この種の資料は○印を附す）。

- 第一部・秋の巻（新居 格訳、昭和14年4月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1260987/1/3>

- 第二部・冬の巻（阿部知二訳、昭和14年8月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1261001/1/3>

- 第三部・春の巻（伊藤 整訳、昭和15年1月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1261013/1/3>

- 第四部・夏の巻（新居 格訳、昭和16年3月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1261026/1/4>

この作品は、次の文章でも言及されている。

- 1) ○「レイモントの農民」『人間復興』（昭和21年、後掲）所収。55コマ

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2976242/1/55>

- 2) ○『民主的な理想農村』（藤書房、昭和22年、後掲）38コマ

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/3857807/1/38>

〔〈小伝〉の記述〕

なお、小松隆二氏の〈小伝〉（『杉並区長日記』（虹霓社、2017年）附載）には、日本文芸家協会の再建について、①この年の10月に再興発起人会が開かれ、新居格もそれに加わっていること、②12月4日に創立総会を開いたこと（会長は菊池寛、新居格は監事）などが記されている。

①②の会合については事実確認をなし得ていない。②の役職については次の文献に記載が見える（67コマ）。

- ◎『日本出版年鑑昭和19-21年版』（日本出版協同、昭和22年）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1142359/1/67>

〔事跡補遺〕

この年の秋に、新居格は森沢昌輝氏とともに札

幌・小樽・函館・室蘭などへ講演に赴いている。

○森沢昌輝「北海道の温泉」『温泉』19巻3号(1951年3月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/4412226/1/13>

新居自身は、《登別にわたしは二度行つた。(中略)二ど目は秋十月で、そのときは第一滝本館という大きな旅館で泊まつた。秋の景色はとても美しい。》と記している。

○新居格「温泉雑感」『温泉』18巻4号(1950年4月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/4412215/1/7>

文化学院の再建準備会(11月17日)にも出席している(読売新聞11月18日、ヨミダス歴史館による)。実際の再開は翌年の4月であった(下記文献の「文化学院略年表」による。332コマ)。

○『愛と叛逆：文化学院の五十年』(文化学院出版部／森重出版、1971年)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/12109744/1/332>

昭和24年当時に理事をしていたこともわかる(「戦後日記抄」昭和24年6月24日・金の条。波書房版『杉並区長日記』所収。この本については昭和22年の条参照)。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/129>

なお、消費組合の活動も、この年の暮れには始まっていたと考えられる(昭和21年の条参照)。

〔検索状況〕

検索状況について記すと、サイニーでは、上の『農民』1件のみである。ざっさくプラスでは、単体で5件、20世紀メディア情報データベースは11件である。

## 昭和21年(1946)〔59歳〕

昭和21年について、〈年譜〉では、次の二つの書物の刊行を記す。

A『人間復興』(玄同社・玄同文庫、発行者・内田久道、装定・西田昭史)

B『新女性教養読本』(協和出版、発行者・村上正男、執筆のタイトル「新女性とモラル」)

〔ABについて〕

A○『人間復興』(玄同文庫、玄同社、1946年6

月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2976242>

「自序」には、①戦後に発表した論文・感想・随筆・小説等から選んだこと、②標題は人間こそが大切だとする考え方に基づくこと、③ルネッサンスもつまりは人間復興の謂であること、④日本にとっては今がルネッサンスの時であること、⑤発表の形式(評論・小説等)にこだわるつもりはなく自由でありたいこと、等々のことがらが述べられている。

B○『新女性教養読本』(共著、協和出版社、昭和21年6月)

新居格は、「新しき女性のモラル」の章を担当している(標題は文章冒頭による。奥付には「著者代表」とも記す)。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1062263/1/7>

①今は如何なる時代であるか、②日本女性の現況は？、③あるべき女性文化、④民主主義の帰着点、⑤あるべき日本女性、⑥女性の教養、などの項目が見える。

〔『濁流に泳ぐ』解説について〕

この年、麻生久の『濁流に泳ぐ』が再刊されており、その解説を新居格が書いている(140コマ)。

◎「『濁流に泳ぐ』について ― 一つの解説 ―」『濁流に泳ぐ』(海口書店、昭和21年11月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1133131/1/140>

初刊は大正12年である。

◎『濁流に泳ぐ』(新光社、大正12年1月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/977968/1/2>

この作品については、大正末期にも批評文を書いていた(標題の「二人」のうちのもう一人は賀川豊彦)。

◎「著作家としての二人の労働運動者」『近代心の解剖』(至上社、大正14年9月)所収

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1021621/1/135>

〔〈小伝〉の記述について〕(消費組合)

〈小伝〉では、①この年に城西消費組合を改めて結成したこと、②東京都西部生協連合会に加盟したこと、③その会長に新居格が就いたこと、④柳沢善衛が組合の活動を支えたこと、などが述べられている(p245)。

①について、再建大会のようなものは確認し得ていない。下記文献によると、協同組合は終戦直後に自然発生的な簇生を見たと言われる（86コマ）。そうした流れの中で、城西消費組合も実質的に活動を始めたということであろうか。

○『現代日本生活協同組合運動史資料集1920-1960年』（日本生活協同組合連合会、1963年）  
: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9888037/1/86>

次の文章では、配給をもらうのに長い時間待つのは無駄だから、昔の消費組合の人たちで手分けして各戸配達してはどうかという腹案を述べている。

○「時局隨筆 四箇の防止事項とは」『科学の友』1巻1号（1945年12月）  
: <https://dl.ndl.go.jp/pid/3545335/1/9>

②③については、『読売新聞』に、昭和20年11月15日に「中央線共同組合連合会」（仮称）の創立準備委員会が開かれ、12月16日に「東京西部生活協同組合連合会」の創立総会が開かれたとの記事が見える（ヨミダス歴史館による。新聞の日付はそれぞれ翌日）。

新居格の役職については、次の座談会の出席者一覧に「都西部生活協同組合連合会会長」とあるのが傍証となる。

○「座談会：躍進する協同組合を語る」『生活科学』4巻6号（生活科学化協会、1946年8月）  
: <https://dl.ndl.go.jp/pid/3556661/1/6>

④の柳沢善衛については次の文献に詳しい。  
・小松隆二「底辺女性の解放を訴えた柳沢善衛の生涯と機関紙誌・パンフレット」同氏著『日本労働組合論事始—忘れられた「資料」を発掘・検証する』（論創社、2018年。第Ⅲ部・第三章）  
デジタルコレクションには、彼の書いたもの3点が一般公開されている。また、『自由ノート』という雑誌（坂元漢・個人雑誌）に、「辻潤の思い出」という文章を連載寄稿していることが、次の文献に述べられている（連載の巻号等は未調査）。

○長谷川竜生「日常の中の反逆性」『新日本文学』24巻10号（1969年10月）  
: <https://dl.ndl.go.jp/pid/6079086/1/83>

『新居格杉並区長日記：遺稿』（波書房、1975年）

に次のように記すのは、この人のことであろうか（「第四部 戦後日記抄」昭和24年6月25日・土の条。この書物については昭和22年の条参照）。

○《柳沢君組合のことで来たる。》

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/129>

〔検索状況〕

検索状況について記すと、サイニーでは2件のみである（上のABの書物）。ざっさくプラスでは、単体で31件（重複4件を除いた）、20世紀メディア情報データベースは142件である。

## 昭和22年（1947）〔60歳〕

昭和22年について、〈年譜〉では、次の2点と、書物の刊行5点（順番は変えてある）とを記す。

①杉並区長選へ立候補、初代公選区長として当選、四月十二日付で内閣総理大臣吉田茂署名の地方事務官叙二級をうける。

②講演を伊豆大仁でする。

A『心の暦日』（川崎出版社・川崎文庫、発行者・川崎備寛）

B『市井人の哲学』（清流社、発行者・橋本尚）

C『民主的な理想農村』（「新農村建設叢書1」、藤書房、発行者・藤宮弘）

D『民主的な理想農村』（「文化農業協会」、発行者・須藤憲三）

E『社会問題』（共著）（二見書房「社会科学講座」第五巻。「婦人問題」を収録。国際社会科学協会編、発行者・堀内文治郎）

〔①について〕

①については、『区長日記』が基本文献となる。死後に三度刊行された。辞令を破り棄てたことが「覚え書」の部「形式に悩まされること」の項に見える（虹寛社版でp120。叙任の日付等は確認しえていない）。

1) ○『区長日記』（学芸通信社、1955年。以下では『区長日記』を総称としても用いる）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2932527>

2) ○『新居格杉並区長日記：遺稿』（波書房、1975年）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437>

3) 『杉並区長日記 地方自治の先駆者・新居格』  
(虹霓社, 2017年)

立候補前から就任直後にかけての思いについては、次の文章に記されている(上のB『市井人の哲学』31コマ以下の三章)。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1044687/1/31>

◎「民主化は小地域から」(初出『中央公論』昭和22年6月号。『区長日記』『覚え書』の部にも再録)

◎「政治的蟹気楼」(初出『社会思潮』昭和22年5月号。再録同上)

◎「心の揺鍾」(初出『月刊にひがた』2巻5号, 昭和22年4月)

次の文献には、立候補中の新居格のようすが細やかに描かれている。

○新居好子「父を語る」『新居格杉並区長日記：遺稿』(上掲)所収

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/6>

〔②について〕

②については、『新居格杉並区長日記：遺稿』(上掲)所収の「第四部 戦後日記抄」に、次の記述が見える(昭和22年10月4～6日の条)。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/114>

○(10月4日・土)午後四時、大仁ホテル着。午後七時から「日本経済の再建と労働組合」の講演、大仁女学校。(以下略)

○(10月5日・日)大仁ホテルの朝。宗光寺部落めぐり、橋本貞吉君に逢う。夜、講演「文化と女性問題」。

○(10月6日・月)午後一時すぎ三島発、雨、夕方四時帰宅。車中、秋雨と落葉との清生寺境内のことを考える。わたしの小説のために。

上の「清生寺」は、昭和19年の4月から新居格の住んでいたお寺である。

○「老学庵にて」『人間復興』(昭和21年、前掲)所収

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2976242/1/57>

なお彼は、越えて昭和23年の元日にも、宗光寺部落に泊まっていた(「／」は改行)。

○(1月1日・木)伊豆宗光寺部落沢田方で目ざ

む。／天気晴朗、風なし。正月らしい正月元旦。

／部落の知識人達幾人かを訪ね、炉辺で語る。

／守木へゆき、橋本英吉君の新築の家を訪ね、

妻君と話しているうちに橋本君、東京より帰る。

夕方沢田家へ。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/119>

〔ABについて〕

A◎『心の暦日』(川崎文庫・3, 川崎出版社, 昭和22年12月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1130289>

B◎『市井人の哲学』(清流社, 昭和22年12月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1044687/1/2>

Aには序跋類は見当たらない。Bには「自序」が附され、①自由を愛好する一箇の市井人でありたいと願っていること、②平凡な市井人としての自分をありのままに語ったこと、③平凡な市井人たろうと欲する人を同志と考え、その人たちとともに語ったこと、④文章の選択と配列には、友人・谷口武氏の尽力を得たこと、等々の事柄が述べられている(谷口氏は、近代社・大正14年の『小国現代短篇集』に、新居格とともに訳者として名前を連ねている)。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/979031/1/2>

〔CDについて〕

C○『民主的な理想農村』(新農村建設叢書1, 藤書房, 昭和22年4月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/3857806/1/1>

D○『民主的な理想農村』(文化農業新書1, 文化農業協会, 昭和22年12月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/3857807>

全76ページの小冊子である。新居の訳した『農民』についても言及されている(CDとも38コマ。URLはCのみ掲げる)。農村には自然の複雑さのあることが、これを読むとよく分かると言っている。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/3857807/1/38>

末尾は、次のような言葉で結ばれている(41コマ)。

○《人生は、たのしく暮らさなければ嘘です。合理的に、村での生活をしつつ、理想的な民主的農村を建設してゆくべきでありましょう。》

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/3857807/1/41>



[E について]

E『社会問題』（社会科学講座第5巻、国際社会科学協会編、二見書房、昭和22年9月）  
新居格の担当した「婦人問題」は123コマに見える。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1044767/1/123>

[『わが青春の日』について]

この年に刊行された書物としては、次の1点を加えることができる（デジタルコレクションには見えないので目次も掲げる）。

F『わが青春の日』新居格編（現代社、1947年10月）

権力に抗して……尾崎行雄  
顧みて皆楽し……長谷川伸  
心の革命期……加藤シヅエ  
若き日の願望……新居格  
人生行路の磁石……馬場恒吾  
若き日……朝倉文夫  
若き頃……入江たか子  
地上に天国を……松岡駒吉  
青春素描……林 麟  
貧民時代の私……賀川豊彦  
筆者紹介

人間について 新居格

[その他の書物]

この年、下の書物が刊行され、新居格は菊池寛とともに序文を寄せている（著者は政治学科の後輩。満州からの引揚げ記である）。

○田中宋太郎『難民記』（報徳出版社、昭和22年10月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1131264/1/4>

[〈小伝〉の記述について]（日本ペンクラブ）

〈小伝〉では、①日本ペンクラブ再建大会が昭和22年2月12日に開かれたこと、②はじめに新居格が開会の挨拶をしたこと（依拠資料は『会報』1号）、③会長（志賀直哉）、幹事長（豊島与志雄）などが選ばれたこと、④新居格は幹事ならびに評議員の任に就いたこと（のちにユネスコ対策委員も）、などが述べられている（pp245～6）。

日本ペンクラブ再建については、次の文献が参考

になる。

○『日本ペンクラブ三十年史』（日本ペンクラブ、1967年）：第二部・第二章「敗戦から大会東京招致まで」（野口富士男氏筆）

上の①は87コマに、②は3ページを越える長文の挨拶であり89～90コマに、それぞれ見える。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1348319/1/89>

③についての直接の記述はないが、87コマに志賀直哉が会長であったこと、豊島与志雄が幹事長であったことが記されている。④については、翌年（昭和23年）の幹事に新居格の名前があがっている（96コマ）。評議員については、再建大会で評議員39名が選ばれたとあるが（91コマ）、名前までは記されていない（ユネスコ対策委員については未詳）。

なお、22年6月26日に「日本ペン・クラブ講演会」が開かれ、新居格は「ペン・クラブと平和主義」の題で話しをしている（92コマ）。

ちにみに新居格は、戦前の日本ペンクラブとも深く関わっていた。次の書物によって、それを知ることができる。

①○『日本ペンクラブ三十年史』（上掲）：第二部・第一章「戦前の日本ペンクラブ」（筆者同）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1348319/1/38>

②○高見順『昭和文学盛衰史 第2』（文芸春秋新社、1958年）：第四章「ペンクラブの今昔」

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1336713/1/50>

たとえば彼は、創立のための第一回の打合会（昭和10年6月19日）に出席していたし（①・39コマ）。実際の発会式は、同年11月26日：①・45コマ）、評議員をつとめていたこともわかる（①・44コマ）。

また、国際ペン大会の東京開催をめぐって新居格の書いた文章（「ペンクラブ私見（1・2・3）」『朝日新聞』昭和11年9月19日～21日）には、『反動的な排外的風潮に対する微妙な抵抗』が見られるともされる（②・56コマ。この大会は、日中戦争が始まったため開かれずに終わった）。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1336713/1/56>

[検索状況]

検索状況について記すと、サイニーでは書物4件がヒットする（上のABEF）。ざっさくプラスでは、

単体で12件（重複1件を除いた）、20世紀メディア情報データベースは99件である。

### 昭和23年（1948）〔61歳〕

昭和23年について、〈年譜〉では、次の諸点と、書物の刊行2点とを記す。

- ①四月、区長の辞表を提出する。
- ②八月、徳島へ帰郷する。
- ③十月、鹿児島、④十二月、甲府へ旅行。
- ⑤日本ペンクラブ幹事、⑥日本ユネスコ協会理事として執筆、坐談会、講演を行なう。

A『無政府主義と虚無思想』（共著）（星光書院、編集・荒川畔村、「無価値の狂騒」、「無政府主義と虚無思想」を収む、発行者・星光）

B『未来の旗』（カール・フリードリッヒ著、翻訳・大泉書店、発行者・島田寅吉）

〔①について〕

①については、『区長日記』の「退職届」の項に全文が載せられている。日付は、「千九百四十八年四月×日」とある（虹霓社版でp84）。また、「区長落第記」の部には「親愛なる都職支部諸君へ」という文章もある（波書房版には「都職組支部」とある。106コマ）。末尾には「健康回復の日を待って、わたしは国際文化の方面に専念するつもりである。」と記されている（同p210）。ユネスコ協力のことを言っているのであろう。『俳句と文学』3巻5号（昭和23年7月）の「編集室から」の欄に、次の言葉が見える。

- 《創刊号に執筆された新居格先生は杉並区長を辞し、専ら日本の文化と世界のユネスコで活躍されて、青年の気魄だ。》

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1727015/1/23>

創刊号（『新俳句』より継承、昭和23年5月。サイニーによる）の執筆については、次の記述が参考となる。

- 《創刊号には、新居格を煩して“民主主義下に於ける俳句”という巻頭論文を掲載、能勢朝次が“老境美と現代精神”という一文を寄せている。》『新俳句講座（第2巻）』（新俳句社、昭和38年）「俳壇の概観」の章

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1362610/1/110>

能勢朝次氏は、『能楽源流考』『世阿弥十六部集評釈』等で著名な国文学者であるが、のちに『虚無思想研究（3）』（昭和24年8月。本年後掲）に軽妙な短文を載せている（表紙ウラの囲み記事）。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940756/1/5>

〔②～⑤について〕

②については、事実確認をなしていない。

③については、『新居格杉並区長日記：遺稿』（波書房、1975年）所収の「第四部 戦後日記抄」に、次の記述が見える（昭和23年10月1日・金の条）。

- 《重富荘で宿泊―島津忠彦君の旧山荘。午後一時より商工会館で講演、約二時間半。聴衆堂に溢れる。》

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/124>

④については、同じくその、昭和23年12月4日・土の条に記事が見える（「／」は改行）。

- 《八時、甲府ゆき準備。／新宿から神近市子氏同行。／一片の雲なき快晴。／夕方、甲府を發し、午後十時帰宅。》

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/126>

⑤の「日本ペンクラブ幹事」については、昭和22年の条で述べた。

〔⑥について〕（ユネスコ協力会）

⑥の「日本ユネスコ協会理事」については、次の書物が参考となる。

- 松尾邦之助『ユネスコの理想と実践』（組合書店、1948年）

氏はユネスコ運動を「サン・ピエール→ルソー」の系列上に位置づけつつ、その現実的修正と受け止めている（あとがき、120コマ）。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1078735/1/120>

新居格はこの書物に次の文章を寄せている（標題の「恐怖」は核戦争の恐怖のこと）。

- 「恐怖からの自由の保障」（8コマ）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1078735/1/8>

新居格の事跡については、次のようなことが分かる。

第一に、ユネスコ運動全国大会（昭和22年11月27日）を開くにあたって、新居格が準備委員長を務め、

大会当日は開会の辞を述べたこと、その趣旨は、権利の主張から戦争が生まれ、義務の履行で平和が保たれるというものであったこと（88～9コマ）。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1078735/1/88>

第二に、「東京ユネスコ協力会」が発足し（昭和23年4月28日）、新居格が理事長になったこと（著者の松尾邦之助氏は、常務理事・事務局長。94～5コマ）。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1078735/1/94>

第三に、各地方の協力会の代表が集まって懇談会が開かれ（昭和23年4月30日）、翌日に「日本ユネスコ協力会連盟」が結成されたこと、またそのとき新居格は議長を務め、東京選出の代表委員にも選ばれたこと（91～2コマ）。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1078735/1/91>

第四に、東京ユネスコ協力会では、「ユネスコ講演と映画の会」を催し（昭和23年6月26日）、新居格や松尾氏も壇頭に立ったこと（95コマ）。

第五に、『ユネスコと日本』（東京ユネスコ協力会編、河出書房、1948年）を出版するために座談会が催され（7月4日）、新居格もそれに出席したこと（同）。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1078735/1/95>

新居格は、この本に次の文章も寄せている。

1）○「私はユネスコを信ずる」『ユネスコと日本』所収（6コマ）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1157535/1/6>

①原子力の時代に戦争はできないこと、②ユネスコの精神は一大国民運動であり《平和を希求する民衆生活の交響楽》（9コマ）であるべきこと、などが述べられている。

また新居格は、ユネスコについて次のような文章も書いている。

2）○「ユネスコについて」『教育と社会』3巻7号（社会教育連合会編、印刷庁、昭和23年7月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2258427/1/10>

3）・「ユネスコの課題」『伝記』2巻9号（昭和23年10月、伝記出版社）

4）○「ユネスコと女性」『青空』3巻3号（広

島図書、昭和24年3月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1722082/1/20>

5）○『社会科事典第9巻』（平凡社、昭和24年8月）「ユネスコ」の項目（約3ページ分の記事。参考文献欄に上の松尾氏の書物もあがっている）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2942113/1/122>

なお、松尾邦之助には次のような情勢認識があったことも『日本ペンクラブ三十年史』（昭和22年の条に掲げた）に記されている。ペンクラブ再建とユネスコ運動とのつながりを理解することができる（対日講和条約の調印は昭和26年9月）。

○《日本は、国連に参加するのはまだ先のことだが、日本ペンクラブを再建して、ペンの関係で、ユネスコへの仲間入りができるかも知れない》

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1348319/1/87>

〔A について〕（虚無思想研究）

A『無政府主義と虚無思想』は、実際には『虚無思想研究（1）』に収載された論文名である。このシリーズは（4）まで続くので、すべてを掲げる。

1：○『虚無思想研究（1）』（星光書院、昭和23年6月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1037871/1/3>

巻末の「あとがき」で、荒川畔村氏は、辻潤（1884～1944）についての思い出や思いを綴ったのちに、次のように記している。

○《本書は辻潤を中心にした雑誌「虚無思想研究」の複刻である。》

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1037871/1/101>

新居格は、大正末期の雑誌『虚無思想研究』および『虚無思想』に下のような論考を載せていた。このうちの①と④とが再録されている。したがって、戦後の第1集は、かつての『虚無思想研究』創刊号の復刻ではなかった。第2号の記事も見えるし（村松正俊「現実の世界と可能の世界」）、『虚無思想』所載の分も収めるからである。

①「無価値の狂想」『虚無思想研究』1巻1号（大正14年7月）

②「虚無思想と社会運動」（同）1巻4号（大正14年10月）



③「こんちらべくちら」(同) 1巻5号(大正14年11月)

④「無政府主義と虚無思想」『虚無思想』1巻1号(大正15年4月)

⑤「バーバラ・ラ・マールと近代女性の享楽主義」(同) 1巻2号(大正15年5月)

2: ○『虚無思想研究(2)』(星光書院, 昭和24年3月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940757>

「後記」(単に「荒川」とあるが, 荒川畔村氏であろう)に, 《辻潤と生田春月のものを除いては, 全部新らしく書いてもらつた。》とある。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940757/1/111>

新居格の名前が, 次のような記述にまつわって現れる。

1) 大正14年, 辻潤後援会の発起人に新居格が名前を連ねていたこと(「震災後と戦災後」荒川畔村)。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940757/1/105>

2) 当時, 虚無思想は革新思想を薄めたものと受け止められていたため, 新居格の「虚無思想と社会運動」(上の②)が, 新聞や雑誌でひどく叩かれこと(同)。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940757/1/108>

3: ○『虚無思想研究(3)』(昭和24年8月。標題は「ニヒリズム研究」が主であるが, 継続性の分かりやすいほうを用いた)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940756/1/4>

新居格の「虚無思想〔ニヒリズム〕我観」を収める(〔 〕内は原文では振り仮名)。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940756/1/18>

「あとがき」(松尾邦之助)によると《第三号の原稿は, その殆んど全部が新しく書かれたもの》との由である。新居格については《朗らかなニヒリズム》という言葉で言及している。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940756/1/122>

4: ○『虚無思想研究(4)』(星光書院, 昭和26年4月。標題は「自由の探求」が主であり(3コマ), 「序」(4コマ)にその趣意も述べられているが, 継続性の分かりやすいほうを用いた)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940777/1/3>

以上の4集については, 蝸牛社版『虚無思想研究(上・下)』各巻の「解説」に詳しく述べられている。

○『虚無思想研究・上』(大沢正道編, 蝸牛社, 1975年)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/12221332/1/125>

○『虚無思想研究・下』(同上)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/12284777/1/131>

なお, 辻潤について新居格は, 昭和初期に次のような文章を書いていた。

①「辻潤君と巴里」『文芸公論』2巻2号(昭和3年2月)

②「巴里―辻潤―」『悪い仲間』(辻潤渡仏送別記念号)2巻2号(昭和3年2月)

また, 辻潤の墓碑を建てるために『『ですべら』の会』というのができた(1949年1月24日。第2集・86コマ)。「自由クラブ」(昭和26年の条参照)もこれに協力して, 五周忌の日(1949年11月24日)にできあがった(第4集・53コマ)。

当日のもようは読売新聞に写真入りで紹介されている。「陀仙辻潤の墓」の文字がはっきりと写っており, 墓に酒をふりかけ, 木魚の伴奏でダンスを踊ったとある(「奇行の霊に“風流供養”」1949年11月25日)。墓碑の文字が谷崎潤一郎のものであることも, この日に先立つ記事に見える(「いずみ」欄11月20日。以上, ヨミダス歴史館による)。

次の文章にも, これらのことが述べられている。

○松山瑞巖「辻潤の思ひ出」『真理』16巻1号(真理舎, 1950年1月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2315510/1/14>

墓碑の写真は次の本にも載せる。

○松尾邦之助編『ニヒリスト: 辻潤の思想と生涯』(オリオン出版社, 1967年)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1336970/1/8>

〔B について〕

B○『未来の旗: 普通人への新たな期待』(カー・フリードリッヒ著, 新居格訳, 大泉書店, 1948年12月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1153197/1/1>

冒頭に「訳者序」を添える(6コマ)。①原題は“The New Belief in Common Man”であること、②原著者は、普通人が民主主義の拠点であり、その睿智と良識にこそ民主主義の本格性があると考えていること、③民衆の中に溶け込んだ一市民としての正しい生き方を、典拠と論理とによって開展してくれたことに快心の共感を懐いたこと、等々について記している。

彼には既に次の二つの著作があった。訳者の関心が那邊にあったかが知られよう。

◎『街の哲学』(青年書房、昭和16年1月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1130299/1/2>

◎『市井人の哲学』(昭和22年の条に掲げた)

[その他の書物]

この年、次の書物が刊行されている。

○『新日本建設の道』(社会教育連合会編、印刷局、1948年8月)

新居格は「第七章 芸術・宗教及スポーツの重視」を担当している(76コマ)。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1156504/1/76>

ほかに、森戸辰男「社会正義の実現」、奥むめお「合理的民主的な生活習慣の確立」、賀川豊彦「平和運動の推進」なども見える。巻末に「新日本建設国民運動要領」(昭和22年6月20日閣議決定)を附す。

昭和22年の5月に片山内閣が成立していた。森戸氏は文部大臣であった。ちなみに、かつて谷崎潤一郎とともに『新思潮』同人だった芦田均は外相を務めている。(官邸HPによる)

: <https://www.kantei.go.jp/jp/rekidainaikaku/046.html>

: <https://www.kantei.go.jp/jp/rekidai/kakuryo/46.html>

なお、森戸氏は次の書物も著している(サイニーによる)。

・『新日本建設国民運動の性格と目標』(公民叢書13、社会教育連合会編纂、印刷局、1948年)

[検索状況]

検索状況について記すと、サイニーでは3件がヒットする。ざっさくプラスでは、単体で11件、20世紀メディア情報データベースは142件である。

昭和24年(1949)[62歳]

昭和24年について、〈年譜〉では、次の2点を記す。

①唐津、佐賀、岡山、萩、防府、下関、鴨川などへ夏期大学講師、座談会ゲストなどに招かれる。

②金沢で、泉鏡花、徳田秋声の碑を見る。

[①について]

①に掲げられた多くの地名のうち、佐賀と岡山については、『新居格杉並区長日記：遺稿』(波書房、1975年)に下のような記事が見える(いずれも「戦後日記抄」)。

○佐賀：(昭和24年6月30日・木)《佐賀県中央公民館総務部長河島徳松氏、田辺繁子さんの紹介状を持って来訪。講演依頼の件。》

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/130>

○岡山：(昭和24年6月25日・土)《岡山県教育委員会より夏期大学講師たのまれる、至急諾の電。》

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/129>

山口県については、『今年〔=昭和24年〕は、山口・岡山・金沢』などへ、夏期大学の講師として出かけたむね、下の書物で述べている(p29。前年にも各地に赴いたむね記されている：p28)。

・『ユネスコと教育刷新、ユネスコ概論』(講演記録、昭和25年の条参照)

[②について]

上の書物で金沢についても触れているが、それ以上の事実確認はなしえていない。ただ、彼が泉鏡花の愛読者であったことは、いくつかの文章で述べられている。

1) ◎『『彩色人情本』その他』『近代心の解剖』(至上社、大正14年)所収。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1021621/1/39>

自分が鏡花の愛読者であることや、高等学校(旧制)受験のため東京に下宿していたところのエピソード、その他を述べている。

2) ○「涼冷の窓に」『近代明色』(中央公論社、昭和4年)所収

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1171313/1/30>

鏡花の「深川浅景」を読むために『東京日々新聞』

を駅の売店まで毎日買いに出かけること、明治以降の作家では鷗外と鏡花とが誰よりも好きであること、などが述べられている。

- 3) ○「微涼を求めて」『生活の鍔』（岡倉書房、昭和8年）所収

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1234251/1/38>

疲れると鏡花を読むことが記されている。

- 4) ○「夏の随想」『野雀は語る』（青年書房、昭和16年）所収

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1130297/1/117>

旧制高校（鹿児島県の七高）のころ、夏休みに郷里徳島で鏡花に読み耽ったことが記されている。

秋声については、次のような評言が見える。

- 《秋声さんがすかれるのは、自由で寛容で、時にはルーズらしいところさへがあつて、そしてちつとも気取らないからだらう。そこにその人の本質が感ぜられる。》『年齢論』『近代明色』（中央公論社、昭和4年）所収

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1171313/1/164>

〔『大地』の復刊〕

この年、『大地』三部作が復刊されている（サイニーによる）。

- A『大地』（パール・バック著；新居格訳、第1部。共和出版社、1949年6月）  
B『息子たち』（大地／パール・バック著；新居格訳、第2部。共和出版社、1949年）  
C『分裂せる家』（大地／パール・バック著；新居格訳、第3部。共和出版社、1949年）

これらが初めて刊行されたのは、昭和10年から11年にかけてであった。

- 『大地』（第一書房、昭和10年9月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1260340/1/4>

- 『息子達』（第一書房、昭和11年6月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1149702/1/3>

- 『分裂せる家』（第一書房、昭和11年12月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1227476/1/3>

パール・バックについては、戦前すでに次の文章を書いていた。

- 1) ○「パール・バック夫人」『伝記』2巻1号（伝記学会、1935年1月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1486472/1/98>

彼女が、その生い立ちからして優れて中国人的であり、中国民族について深い理解を持っていることなどを述べている。

戦後になってからも、次のような文章が見られる。

- 2) ○「パアルバックの大地」（『人間復興』昭和21年・所収）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2976242/1/56>

あらすじを紹介したのち、『土の文学として傑作的地位を保持する』と評している。

- 3) ○「バック・人並に作品」（同上所収）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2976242/1/60>

パール・バックについて、①生い立ち、②作品、③中国観、④思想、⑤人生観その他、などの項目に分かって、総合的に解説している。②では『龍種』（『龍子』のこと）の翻訳が必要であること、『和平なし』を戦時中に半分まで訳して雑誌に載せたが、残りは発禁になったこと、なども記されている（雑誌名や原題については未詳）。

- 4) ○「パアル・バック」『アメリカ文学』2巻9号（昭和24年3月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1845072/1/11>

中国に取材した作品が特にすぐれていることを述べている。『龍子』を繙読中であることや、『和平なし』へのコメントなども記されている。

〔検索状況〕

検索状況について記すと、サイニーでは9件がヒットする。ざっさくプラスでは、単体で7件（重複1件を除いた）、20世紀メディア情報データベースは107件である。

## 昭和25年（1950）〔63歳〕

昭和25年について、〈年譜〉では、次の1点と、書物の刊行1点とを記す。

- ①一月、生活協同組合の理事長を辞す。

A『龍子』（パールバック著、労働文化社、発行者・河野来吉）

〔①とAとについて〕

- ①については、事実確認ができていない。

Aは、上下2巻の分冊である。

○『竜子上巻』(労働文化社, 1950年6月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1706818/1/3>

○『竜子下巻』(同)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1706888/1/3>

上巻冒頭に附せられた「訳者の言葉」(6コマ)には、①かつて読んだ『和平なし』という作品(パール・バック)に抗日ゲリラ戦が描かれていたこと、②『龍子』にも日本軍の中国農民に対する残虐行為が描かれていること、③文学作品としてばかりでなくそれらの事象に注目すべきであること、④左眼眼底出血の病苦を押して訳出したのも、そうした思いからであること、等々のことがらが述べられている。〔その他の書物〕

この年、ユネスコ関連の書物が刊行されている。

B『ユネスコと教育刷新, ユネスコ概論』(森戸辰男著, 新居格著, 文部省大臣官房渉外ユネスコ課, 1950年, 文ユ資料35号)

「まえがき」(西村巖。日付は「七月十日」)によると、1949年11月に「ユネスコ, ゼミナール」が甲府市で開かれた。講師はこの二人のほかに次のような人がいた。

①仁科芳雄(日本ユネスコ協力会連合会長)

②渡辺 慧(立教大学教授)

③金森徳次郎(国会図書館長)

④蛭山政道(評論家)

それらの講演記録を「文ユ資料33~35号」に収めたとのことである(サイニーの蔵書検索によると、①②の分が33号に見える。③④は34号と思われるが、所蔵館がない)。

講演で新居格は、ユネスコ運動を形だけですませるのではなく、一人一人がそれぞれの立場から、平和の実現について《ほんとうの血肉》をもって考えることが大切だと言っている(p33)。また森戸氏は、ユネスコの本質を平和教育という点に認めたうえで、新憲法や教育基本法がユネスコの精神に合致することを述べている。森戸氏は、かつて松尾邦之助の『ユネスコの理想と実践』(昭和23年の条に掲出)に「推序」を寄せた人でもあった(当時の肩書きは文部大臣)。

また、『大地』三部作も再刊されている(サイニー

による)。前年に出されたものの縮刷版である。

C『大地』(パール・バック著; 新居格訳, 共和出版社, 1950, 縮刷版, 第一部・第二部・第三部)

なおこの年、次の文章が発表されている。読書遍歴を鳥瞰的にまとめたものとして貴重な文献と言えるよう。

・「逝く水(読書自伝)」『群像』5巻4号(1950年)

〔検索状況〕

検索状況について記すと、サイニーでは13件がヒットする(重複1件を除いた)。ざっさくプラスは12件(重複2件を除いた)である(20世紀メディア情報データベースは昭和24年まで)。

## 昭和26年(1951)〔64歳〕

昭和26年は、新居格逝去の年である。〈年譜〉では、次の二点を記す。

①愛知大学文学部長、秋葉隆より「現代文学論」の講義を依頼される。

②十一月十五日、脳溢血により死去。

〔①について〕

愛知大学は、京城帝国大学・台北帝国大学・東亜同文書院の三つの学校に由来するとされる。

○竹内好「東亜同文会と東亜同文書院」『竹内好評論集第3巻(日本とアジア)』(筑摩書房, 1966年。初出『中国』21号, 1965年)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2977272/1/202>

秋庭氏の名前は次の書物に見え、『愛知大学文学部長』と記されている(54コマ)。新居格への講義依頼については、事実確認をなし得ていない。

○『人事興信録第16版上』(人事興信所, 1951年)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2997928/1/54>

秋葉氏には、満洲民族に関する著作があった。

○『満洲民族誌』(東方国民文庫・第8編, 満日文化協会, 1938年)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/3462025>

他方、新居格は昭和4年に満蒙旅行に出かけていた(その旅程については、次の文献参照。「満州は東洋のバルカンである」との言葉も見える。6コマ。

URL は本学図書館 HP)。

・田中敏生「新居格の初度中国旅行・旅程拾遺  
― 読売新聞および戸川秋骨の記事を用いて ―」  
『言語文化』8号(四国大学, 2010年)

[http://adcweb.g.shikoku-u.ac.jp/organ\\_repository/community/journal\\_articles/language\\_culture/07.pdf](http://adcweb.g.shikoku-u.ac.jp/organ_repository/community/journal_articles/language_culture/07.pdf)

一緒に旅行をした加藤武雄は、新居格が「満蒙抛棄論」を唱えたことを、戦後になって追懐している。

○加藤武雄「横顔」『文章倶楽部』2巻6号(1950年8月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/11209533/1/6>

人物については《なか―デリケエトな人》と評して、新居格の次の自詠を引いている(同上)。

《この男かたちは牛に似たれども心はやさしひなげしの花》

なお新居格は、愛知大学文学会の評議員に名を連ねていた(会長は秋庭氏)。

○『文学論叢』2号(愛知大学人文社会学研究所, 1950年10月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/4430240/1/2>

〔②について〕

②について、丸山義二氏は次のように記している(「/」は改行)。

○《ことしに入つてかれが病床につくようになってから、かれは毎日のようにハガキをわたくしにくれた。わたしも返事をかいて、その時々『分流』のことにふれた。／がとうとうそれは書きだす以前の覚え書のままと残つた。／一九五一年十一月十五日午後五時三十分、かれはとこしえに帰らぬ旅路に発つていつたからだ。わたしばかりの痛恨事であろうか。(十一月二十日)》『農民の友 新居格』『農民文学』6号(1952年2月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1854434/1/28>

『分流』というのは、新居格が構想していた長篇小説のことであり、郷里徳島の豪農を扱うはずのものであった。丸山氏は、かつて「家の光」の企画として一緒に農村を廻ったことがあり、その時この構想を聞いたのであった。なお丸山氏は、次の座談会に新居格とともに出席している。

○「座談会農村封建性の打破」『大地』2号(農民文学者会編, 赤坂書店, 1946年9月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1839310/1/34>

〔その他のことがら〕(世界の村)

昭和26年には、「世界の村」構想を打ち出すものとなった集まりのあったことが、次の文章に記されている(〔 〕内は原文では振り仮名)。

・新居格「“世界の村〔ヴィラージュ・ユニヴェルセル〕”運動趣意書」『毎日情報』6巻5号(1951年5月)

メンバーは新居格の他に、松尾邦之助・松村正俊・石川三四郎・小牧近江・大澤正道の5人がいた。会の名前は「H・H会」にしようという提案が、小牧氏から出された。仏語《honnête homme》(正直な人間)の略で、下の本から《人間たる以外に何の色も着かぬ人間》《融通無碍の人間》(7コマ)という説明を引いている。人間であるということ以外に、何らの被規定性をも帯びない自由な人間との謂であろう。

○落合太郎『モンテニユ』(大教育家文庫・11, 岩波書店, 昭和12年。昭和23年版もある)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1718345/1/7>

この会については、次の文章でも述べられている。

○新居格「オネートムとコンモンマン」『産業と産業人』4巻3号(産業社, 1951年3月)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2234483/1/20>

会の集まりを呼びかけたのは新居格だったが、「世界の村」構想を言い始めたのは小牧氏であった。それについて皆のしゃべったことを大澤氏がまとめ(原稿用紙6枚)、それを新居格が2枚に縮めて「趣意書」ができあがった。ひとりひとりの心が自由を求めれば、世界は自ずと平和になるのではないかというのが基本的な考えであった。また、人間には夢見る自由が許されているのだから、臆することなく表明しよう、一粒の麦が一粒で終わってもいいから種を蒔いてみようというのが基本の姿勢であった。

なおこの文章には、戦前の「学芸自由同盟」についても記されている。「非ドイツ的」の故をもって焚書を行なったナチスに対する抗議を機にできた集まりであるが、そもその起こりは、高円寺の街で



新居格と田辺耕一郎とが会って、三木清や石浜知行に呼びかけたのがきっかけだったとのことである（田辺耕一郎氏によれば、氏が新居格に電話をかけて呼び出したとされる。下記文献 p79）。

- ・田辺耕一郎「学芸自由同盟から「現実」まで」『文学』26巻4号（1958年）

この会については、下の文献に記述が見える。それによると、創立大会は昭和8年7月10日であり、『豊島与志雄は司会の新居格の指名で議長となり、議事を進めている。』と述べられている。

- ・関口安義「学芸自由同盟のこと（子午線）」『日本文学』34巻3号（1985年）

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihonbungaku/34/3/34\\_KJ00009957328/\\_pdf-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihonbungaku/34/3/34_KJ00009957328/_pdf-char/ja)

世界の村に帰ると、件の趣意書は次の文献に全文が引用されている（p264）。

- ・大澤正道「〈エッセイ〉新居格と「世界の村」のことなど」新居格『杉並区長日記』（虹霓社、2017年）附載

大澤氏は『虚無思想研究』（昭和23年の条に掲出）にも、いくつか文章を書いていた。

- 1）「「知る」「ある」の問題」（第2集）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940757/1/151>

- 2）「ジェームズ・G・ヒュネカーとそのスチネル論」（第3集）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940756/1/63>

- 3）「自由クラブのこと」（同）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940756/1/130>

- 4）「共産主義の自由と「われわれの自由」について」（第4集）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940777/1/14>

- 5）「エゴイズムの哲学」（同）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940777/1/48>

- 6）「「自由クラブ」のこと」（同）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940777/1/53>

彼自身は、「自由クラブ」という会合を開いていた。上の3）にメンバー一覧があり、松尾邦之助や村松正俊の名前も見える。『アフランシ』というリーフレットを発行していた。名前の由来は、仏語《affranchi》（解放された、自由な、無頼の、郵便

料金支払済の、等の意味がある）であることが、下の文章に述べられている。

- 「附録 アツフランシスムの宣言」（第3集。標題は目次による）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940756/1/125>

新居格は「フリーダムとリバッチー」という文章を、その第1号（昭和26年4月）に載せた（短い囲み記事であり、村松正俊「自由人の一断想」と同居している。緑蔭書房復刻版による）。大澤氏の〈エッセイ〉は、これも引用している（p266）。また次の論考にも引用が見える（p22）。

- ・大澤正道「現代を超える自由の哲学」『思想』昭和44年10月号（544号）

ちなみに大澤氏のこの論は、「自由」という言葉の来歴と、そこに込められるべき真の精神とを論じて、きわめて問題喚起的である。

この年の新居格の健康状態について、大澤氏の〈エッセイ〉は次のように記す。

『新居はその年（昭和二六年）春に病に倒れ、十一月十五日に亡くなった。』（p267）

〔検索状況〕

検索状況について記すと、サイニーでは7件がヒットする。ざっさくプラスは1件のみである。

〔備考〕（死亡記事、遺稿、追悼文など）

次の文献に『毎日新聞』（11月16日）の死亡記事が収録されている（36コマ。「松沢教会」の設立者は賀川豊彦）。

- 『新聞月鑑』3巻35号（11月号）（新聞月鑑社、1951年12月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/3556315/1/36>

『新居格氏』十五日午後五時卅分東京杉並区阿佐ヶ谷三の四八九の自宅で脳いっ血のため死去。六十三歳。告別式は十八日午後二時世田谷区上北沢三の八六三日本キリスト教団松沢教会で行う。（以下経歴等略）

読売新聞では、死亡記事（11月16日）のほかに、「よみうり寸評」（同）や「編集手帖」（17日）でも新居格について述べている。前者には、あと10年ぐらひは活躍してほしかったとの思いも記されている（以上、ヨミダス歴史館による）。

新居格の次の文章が、死の翌年に発表された。末尾に遺稿となったむね注記されている。自筆書簡の人生的意味について述べている。阿佐ヶ谷の家で静養していたこともわかる。

○新居格「書信の味わい」『郵政』4巻1号（日本郵政公社広報部門広報部，1952年1月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2809257/1/15>

また、追悼文に類するものとしては、先に掲げた「農民の友」を含めて、次のようなものが見える。

1) ○丸山義二「農民の友 新居格」『農民文学』6号（農民文化協会，1952年2月）前掲

2) ○丸山義二「十一月十五日の事：「麦の会」と新居格と」『農林春秋』2巻2号（農林協会，1952年2月）：九月に最後に会ったときの様子や書信の引用，十五日に帰宅すると危篤を知らせる速達が届いていたが終電に間に合わず，改札口に立ち続けたこと，などが記されている。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/11209266/1/16>

3) ○秋山清「新居格さんのこと」『新日本文学』7巻2号（新日本文学会，1952年2月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/6078874/1/24>

4) ○高宮鶴夫「故新居格氏を悼む」『日通文学』5巻1号（日通ペンクラブ，1952年1月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/7917284/1/25>

5) ○木村毅「彼は漫人だった」『文章倶楽部』4巻1・2号；新年号（牧野書店，1952年1月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/11209544/1/6>

6) ○「編集余録」（中身は新居格追悼）『視聴覚教育』6巻1号（日本視聴覚教育協会，1952年1月）：新居格が「日本映画教育協会」の前会長であったことがわかる。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/6067968/1/37>

7) ○「太稚庵日誌」『高志人』17巻1号（高志人社，1952年1月）：「新居格の死」という項目が見える。筆者名はわからないが，新居格が朝日の学芸記者をやめたあとに入社したとある。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1755491/1/25>

次の文献に「新居格記念文庫」の記事が見える。

1) ○渋川驍「図書館めぐり19：明るさと秀れた色調：東京都杉並区立図書館」『読書春秋』3巻8号（春秋会，1952年8月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/10987318/1/18>

2) ○「図書館ニュース」（「蔵書（新居氏）と絵の寄贈」の項目）『図書館雑誌』46巻10号（日本図書館協会，1952年10月）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/11230374/1/5>

## 附 聖ガンジー協会

新居格の戦後における社会活動について、〈小伝〉では次の四つについて詳しく述べている（p245以下）。

①消費組合 ②日本文芸家協会 ③日本ペンクラブ ④杉並区長

これに対して、次の二つについては、事項の指摘のみに留まっている（p246）。

⑤ユネスコ ⑥聖ガンジー協会

このうち、⑤については昭和23年の条で少しく述べた。他方、⑥についてはよくわからない点が多いが、これまで調べ得た限りに記しておく。

第一に、創設者は下中弥三郎氏（平凡社社長）であり、会長も彼が務めていた。『下中弥三郎事典』（下中弥三郎伝刊行会編，平凡社，1965年）に次のような記述が見られる。

○《ひところ杉森孝次郎とガンディー協会などを起こしたこともあった。》「ガンディー」の項

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2983112/1/37>

○《日本のガンジー協会の会長をしていた因縁もあり》「中近東アラブ圏旅行」の項

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2983112/1/145>

杉森氏については、具体的な資料は見出せていない。

第二に、この協会は終戦よりも前からあった。臼井吉見『安曇野 第四部』（筑摩書房，1973年）に、次のような一節が見える。

○《一緒にガンジー協会をつくったいきさつを語って、先輩を尊敬する念の強かった故人について語ったのは、平凡社社長の下中弥三郎であった。》（260コマ）

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/1674368/1/260>

「故人」とは、インド独立運動に尽力したラス・ビハリ・ボースのことであり、そのお通夜に集まった人たちの言葉を紹介する一節である。彼の死は《(昭和20年)一月二十日の朝、突然脳溢血がきて(中略)二十一日午前二時すぎ、おだやかに息を引き取った。》と記されている(259コマ)。

第三に、戦後の一時期(昭和24年頃)にも、この協会は存在していた。『新居格杉並区長日記：遺稿』(波書房、1975年)「第四部戦後日記抄」に次の記述がある(昭和24年。「／」は改行)。

○《ガンジー会もしっかりしない。運動という運動がいやになる。》(6月25日・土)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/129>

○《中山君、聖ガンジー会理事辞表を持って来る(代人)。彼の事大主義も変なものだと思う。》(6月26日・日)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/129>

○《午後五時少し前、聖ガンジー協会のガンジーを偲ぶ講演会挨拶にゆく。講演は片山、松尾、長沢氏など。／堀木克三、土方定一などに逢う。日比谷公園を歩いて七時半過ぎ帰宅、原稿(短歌)。》(6月29日・水)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9634437/1/130>

また、『虚無思想研究(3)』(昭和24年)に「辻潤追悼、虚無思想講演会」をめぐる記事があり、その出席者について述べたところに、《聖ガンジー協会の安氏》という一節が見える(123コマ)。因みにこの講演会では、松尾邦之助や新居格も講師を務めている(同)。

個人主義と虚無……松尾邦之助

辻潤と虚無思想……新居 格

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2940756/1/123>

第四に、インド本国にも「ガンジー協会」があったらしい。星野芳樹『動乱のアフリカを行く』(ダイヤモンド社、1965年)という本に、次のようなことがらが述べられている。

○《日本山妙法寺の丸山行遼師の手で、インドのガンジー協会からの簡単な招待状がととのえら

れ、それを手がかりに、昭和二十七年の暮、貨物船に便乗してインドに向かうことができた。》

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2976040/1/5>

第五に、ランザ・デルバストという人(『反暴力の手法』の著がある。西尾昇訳、新泉社、1980年。著者名表記は「ランザ・デル・ヴァスト」)が創設者であつたらしい。『良心的兵役拒否：その原理と実践』(新教新書、日本友和会編、新教出版社、1967年)という書物に、次のような記述が見える。

○《一九六〇年に、アンドレ・トロクメは、ガンジー協会の創設者ランザ・デルバストと共に、アンフラゴンの近くの、軍の原子力センターにおけるデモを指導した。》(第五章「フランスの良心的兵役拒否とその法律」の第一項「平和運動」)

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/9581667/1/43>

なお、「聖ガンジー協会」とは別に「ガンジー平和連盟」というものもあったことが、下の書物に述べられている。

○中濃教篤・壬生照順『信仰者の抵抗：宗教平和運動の歴史』(誠信書房、1959年)

この本の「日本におけるガンジー運動」という項目では、①「ガンジーを偲ぶ懇談会」が催されたこと(1950年1月31日：ガンジー殉難の二周年目)、②会長の森戸辰男が挨拶を行い、武器の暴力によって平和は得られないというガンジーの精神に則って、平和日本の建設と世界平和の実現に邁進するむね述べたこと、などが記されている。

: <https://dl.ndl.go.jp/pid/2994863/1/38>

## むすび

以上、新居格の年譜的事項をめぐる、昭和20年代を中心に述べてきた。はじめにも記したように、彼の活動は極めて広範囲にわたるため、その事跡を確定するのに大きな困難が付きまとう。ここでの試みが、それを乗り越えるための、聊かの足掛かりにでもなり得ているならば幸いである。

(田中敏生 四国大学名誉教授)